

本論文は

# 世界経済評論 2019年5/6月号

(2019年5月発行)

掲載の記事です



## 世界経済評論 定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料  
OFF

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読  
期間中

### デジタル版バックナンバー 読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。  
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp  
雑誌のオンライン書店

先だって友人の John Gillespie から、インターネットに出た H. L. Mencken の鋭い警句に顔写真を添えたものが回ってきた。警句の曰く、

「民主主義が完璧なものとなるにつれて、大統領職が人民の内的魂をますます近く代表するものになる。そして、ある偉大な輝かしい日、この国の単純な人たちは遂にその本望を達し、ホワイトハウスは紛れのない馬鹿で完全に自己陶醉の間抜けに占拠される」(Baltimore Evening Sun, 1920年7月20日)。

「間抜け」は moron で、レックス・ティラソン 国務長官がトランプ大統領をそう呼んだことが明らかになったのは昨春だったが、実際にはその前年の7月国防省での安全保障会議中のことだったという。

もっとも、ギレスピー君がメンケンの言葉をほくに送る気になったのは、同類の罵言でトランプを決め付けた人が何人もいたからだだったために違いない。すなわち、

- ・ジム・マティス国防長官(元海兵隊大将)はトランプを「5年生か6年生」の理解力しかないと決めつけた。
- ・ジョン・ケリー大統領首席補佐官(元海兵隊中將)はトランプを idiot と何度も呼び、その他大統領を侮蔑する表現を使った。ケリーの前任者ラインス・ブリーバスも同じ言葉を使った。
- ・ギャリー・コーン国家経済会議議長はトランプを dumb as shit と呼んだ。
- ・H. R. マクマスター国家安全保障担当補佐官(元陸軍中將)はトランプを dope と呼んだ。云々。

### 破廉恥な自慢、嘘

実際、トランプの政治集会(political rallies)や、閣僚会議、記者会見(大半ホワイトハウスからヘリコプターに乗る前に記者が投げかける問いに応

えるもの)での口ぶり、はたまた Twitter の表現は、全て破廉恥な自慢か他人の誹謗、または虚偽である。そこで「紛れのない馬鹿 a downright fool」でなければ「完全な自己陶醉の間抜け a complete narcissistic moron」がびったりとなる。

もっとも、インターネットを見ると、メンケンのこの有名な言葉は2016年トランプが大統領になった頃から様々に引かれており、Twitterでこの言葉を引いた人の中には流行作家 Stephen King もいる。また、多少遡ると、2004年ジョージ・W・ブッシュ大統領が再選された頃から引かれ始めているらしく、その点オバマも例外ではない。ということは、この言葉は自分の好みめ大統領をこき下ろす言葉になったわけだ。

ただ、ブッシュやオバマの場合、トランプのように自分の閣僚その他の側近からバカ呼ばされた形跡はない。とはいえ、ブッシュの副大統領ディック・チェイニーが背後でブッシュをどう罵っていたかは神のみぞ知る。チェイニーは、ブッシュの副大統領候補を選ぶ委員会の会長になりながら、結局自分を候補として推薦し、選挙とともに副大統領になって大統領のブッシュを牛耳った。

### 民主主義は衆愚主義

ヘンリー・ルイス・メンケン(1880-1956)は「ボルティモアの賢人」と呼ばれる随筆家かつ作家で、特に鋭い文化批評家だったが、学者でもあり、アメリカ英語と英国英語の違いを叙述した大部の“The American Language”はほくも短縮版ながら持っている。このメンケンの「民主主義」に対する侮蔑は、いわゆる「中産階級」に対する侮蔑と併せたものだ。前者には boobocracy、後者には Booboisie という造語を当てたが、どちらも「無知な人間」という意味のアメリカ語 boob に基づく。後者は申すまでもなく boob と bourgeois-

sieを組み合わせたものである。

二つのうち boobocracy の考えは、アメリカでは国家創建の頃に戻る。この国は、後に自らを「民主主義の導き手 beacon of democracy」と見なし、民主主義的でないと見なした国には戦争を仕掛けるほどになったが、日本で江戸時代に徳川家康を「神祖」などと呼んだような畏敬を以って呼ぶ「建国の父たち」は、民主主義を衆愚主義 mobocracy として、考慮すら入れなかった。それを端的に示すのが憲法第二章第一条で、大統領と副大統領の選出を、国民投票によるものではなく、各州を代表する上院議員と下院議員を electors として、その投票によって決めた。それが electoral college と呼ばれる制度である。

アメリカが民主主義の礎とみなす国民投票が大統領選任に取り入れ始めたのは1824年、electorsのうち上院議員が各州民の一般投票によって選ばれ始めたのは第17修正条項が成立した1913年だった。それ迄は州議会が選んだ。しかし、electoral college が依然として存続することは、2000年選挙でブッシュが、更に2016年トランプが大統領に選ばれたことで周知のとおりである。

上院議員が人口とは関係なしに各州二人ずつという制度も、「一人一票 one man, one vote」という選挙投票の原則に大きく反する。この原則を最高裁が認めたのは実に1962年であったが、その判決でも上院議員の選出には触れず、その他の変則的な選挙制度とともに残っている。選挙妨害も依然としてあからさまだ。

### 久米邦武の見識

アメリカが自国を民主主義の権化と見なしても、現実にはそれを否定する見方はいくらかもある。例えば、Yale で長年教えた政治学者 Robert Dahl が2001年に出した “How Democratic Is the

American Constitution” は、他の国々と比較してアメリカがどれほど「民主主義的」かを簡単にまとめたものだが、それによればアメリカの点数は低い。これも、ダールの指摘するとおり、アメリカ国民が18世紀末に成立した憲法を聖典と見なしているためだ。

民主主義といい、それをアメリカが誇示することを考えて、ほくがいつも思い出すのは、岩倉使節団の報告を書いた久米邦武の言葉である。1872年初め、ワシントンに着いた一行は、「米国ノ民」が憲法に基づく政体を「奉戴」し事あるごとに自慢するのに会った。それは「三尺ノ童」も変わらない。しかし、「固リ人為ノ法ニ、完全ノモノアルヘカラス、人民ニ伸ヘハ、政府ニ縮ム、自由ニ切ナレハ、法度ニ慢（ゆるやか）ナル、一得一失、理ノ自然ナリ」と久米は喝破した。

久米の時代はグラント大統領の時で、「各州ニテ自主ノ権義ヲ張り、大統領ノ権ヲ抑ヘ」ていただろうが、その後大統領の権限が大きく拡大し、君主制における王とほとんど変わらぬものとなったのも問題である。

最近、Princeton 大学出版部が “Against Democracy” という真っ向に民主主義を否定する本を出した。ほくはまだ読んでいないが、出版社の広告によれば、著者は Georgetown 大学の政治哲学者 Jason Brennan。ブレナンの論旨は、人は皆、民主主義は特異に公正な政体であり、皆が政治力に参加するのは全ての人に良いと信じている。しかし、これは間違いで、民主主義は無知で理不尽な人々による統治である。政治は手続きではなく結果で判断されるべきで、その点、民主主義は epistocracy (知識主義) に代わられるべきと説く。この議論には、厳しい批判があることは申すまでもない。

さとう ひろあき 翻訳家、コラムニスト在 NY